

---

**愛は独りよがり。**

音宮 音音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛は独りよがり。

### 【Zコード】

Z8240C

### 【作者名】

音宮 音音

### 【あらすじ】

少女の愛はどうにも自分勝手。しかも暴走気味。人間の嫌な部分も見えちゃってやな感じなお話です。ただ、後味スッキリ…?

私は恋をしました。

相手の人は、斎藤 亮君といいます。

彼はとても優しい人で、この間、雨に濡れて可哀想な捨て猫に傘をさしてあげていました。

そして彼は、雨に濡れながら家に帰ったのです。

私は、その優しさを見て彼の事が好きになつたんだと思います。

「亮？ アイツ財布スッても気付かない位鈍感でさ  
その上、超運痴！！パシリにも使えねえ！」（爆笑）

「なんで斎藤の事聞くの？もしかして好きとか？」（笑  
アハハ！んな訳ないよね～

アイツ、キモいし、キタネエじやん！

しかも、オタ！アハハハハ、笑える～！」

彼の事いじめている男子がいるとか、彼の事蔑んでいる女子が居る事は知っていました。  
でも、私の彼を想う気持ちは変わりません。

私は、彼を本気で愛しているからです。

私は、彼の塾下校時や、学校の中でも、出来るだけ近くに居ました。

彼は、友達が居ないよりで、とても寂しそうでした。

居るといえば、彼をいじめるヤツラだけです。

私は、声をかけてみたいと思つたけど、結局なんだか恥ずかしくて、無理でした。

そうだ！

私は思いつきました。

なにか共通の趣味が見つけられれば、話しかけやすいかも知れません。

彼は基本的に無口なのですが、彼の事をいじめる男子とも、一応たまには喋ります。

それをずっと聞いて、調べました。

彼の趣味は、ゲームとプラモデルです。

ゲームは、RPGが好きな様でした。

プラモデルは、ロボットとかのじゃなくて、車とか、そういうののプラモデルらしいです。

私とは、随分とかけ離れた趣味でした。

なかなか難しいですね。

話しかけるキッカケも掴めず、数か月。

私の中でただひたすらに、彼への想いだけが膨らんでいきます。

耐え兼ねた私は、ついに彼に告白する事にしました。

夕暮れの校舎裏。

ほとんどの生徒は、帰ったか、部活か。

そこに、彼を手紙で呼び出しました。

「好きです！

付き合つて下さいー！」

私は单刀直入に言いました。

彼の答えは、

「えつ……？？」

あの……

…「めんなさい」

何故？

何故断られたのかが、分かりませんでした。

けれど彼は、言った直後、逃げるよ<sup>う</sup>に去つていつてしましました。

私はただ、棒立ちです。

次の日、学校の廊下で、彼とすれ違いました。

顔を合わせせず、らしくて、俯いて早歩きします。  
彼も、小走りで去つていついた様です。

授業中、彼の事を考えて居ました。

彼は、昨日私の告白を断りました。

私にはその事が納得いかず、夜も寝ないで理由を考えました。

でも、分からな immediacy ました。

そうだ、多分いきなりだったから、びっくりして思わず断つてしまつたんだ。

そんな答えが浮かんだのは、夕方の家での事でした。

なんで、そんな単純な解答に気付かなかつたんでしょう。

彼は、いじめられたり、蔑まれたりが多いせいと、自分を愛してくれる人がそう簡単にいるとは思っていないのです。

どうせ、ジャンケンで負けたんだるとか、そんな疑心暗鬼な事思つてているに違いありません。

だから、今こそ私の本気の愛を伝えて、彼は一人じゃないと、気付かせてあげなくてはいけないのです。

私だけでも、彼の事愛していると言つてあげなければ…。

私は、幸い彼の家を知っていたので、彼の家まで行きました。

彼の家に、チャイムを鳴らして入るのもなんだか恥ずかしいです。だから、彼の家からちょっと離れた曲がり角で、待っている事にし

ました。

そして、彼が出て来たら、偶然を装つて角から出でてくるのです。

完璧。

そして、数時間待つて、彼が出てきました。

彼と、彼のお母さん。

と、

女の子が居ました。

結構、美人だと思います。

彼には、兄弟は居ないはずですから、親戚の子でしょうか？

彼は、その女の子と2人で歩きだしました。

家に送つていいくのでしょうか？

私は、彼と女の子についていく事にしました。

2人は公園に来ました。

早く送つて行つて、彼が1人になればいいのにと思いました。

でも、それどころじやない出来事が起つたのです。

2人は、

少しづつ近付き、

抱き合い、

キスをしました。

私は、驚きました。

もちろん2人のキスにも、驚きました。

でも、それより、

彼の事、好きとかいう気持ちが、ゼロになつたのです。

それに驚きました。

その日私は、何事もなかつたかの様に家に帰りました。

後から聞くと、彼と女の子は幼稚園からの幼馴染で、高校が別になつてからあまり会えなくなつたそうです。

でも、2人は今までと変わらぬ付き合いを続け、そして、結ばれた  
…という、なんだか漫画の様な関係でした。

私は多分、『誰にも愛されない彼』を愛していましたのだと思います。

私にだけ愛されている彼は、私に依存し、そして私は優越感を得る。

周りからは、なんであんなのと付き合つてるんだろう、彼女ならも  
つとも奴と付き合えるのに、と言われる。

私の評価だけ上がるのです。

私の恋の正体はそんなものでした。

そう思うと、私はかなり嫌な人間でした。

今だつて、なんで彼に告白してしまったんだと、せつ思つているのです。

顔は微妙、頼りないし、趣味もあり得ません。  
私の好みじゃないのです。

彼がいい人間だというのは、多分事実なのにです。

私は、自己嫌悪に苛まれました。

それから、幾日か過ぎ……。

私は、校舎裏に居ました。

目の前には何故か、『彼』が居ました。

理解不能です。

「こ」の間は、逃げで『めんなさい……  
今度は僕からお願ひします、  
付き合つて下さい！」

さて。

彼が彼女と別れてしまったのか、そうじゃないかは知りません。

でも、答えは一つ。

パシーン！

夕暮れの校舎にて、靈氣の良い音が一つ響きました。

終。

(後書き)

スタンダードな恋愛モノを求めてきた人、ごめんなさい！  
まあ、作者の性格歪んでるって事で。

恋愛がメインの話なんで、恋愛にしましたが……（というか、それ  
以外ならどんなジャンルだろう？）。  
ジャンル違い言われたらどうしようつ……。

許して下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8240c/>

---

愛は独りよがり。

2010年10月19日17時52分発行